

## ◎社会的弱者を雇用し品質の高い農作物や酪農製品の販路開拓を支援する協力・連携体制を構築

No.01	「ソーシャルファーム十勝農場（仮称）」（H24）		
実施主体	特定非営利活動法人 コミュニティ・シンクタンクあうるず	実施市町村	北海道 十勝地方

### ◎事業の背景

十勝の一次産業就業人口は年々減少（2000年に28,234人→2010年で25,509人）しており、現在は労働生産性の向上により粗生産額を何とか維持している状況である。

このため、新たな労働力の確保と、農業の6次産業化等による高付加価値化の取組みが急務となっている。

新たな農業の担い手として、障がい者施設や授産施設を活用した取組みが着目されており、十勝地域では共働学舎新得農場が先進事例として知られている。共働学舎新得農場では障がい者をはじめ、刑余者や不登校など、様々な理由により一般的な労働市場では受け入れられにくい社会的弱者が共同生活を営みつつ、農業と酪農を行っている。特に、ここで生産されるチーズは世界的にも高い評価を受けており、重要な収入源となっている。一方、厚生労働省の「工賃倍増5か年計画」で示されるように、障がい者施設においては賃金水準の向上が課題となっている。

当NPOでは、道内の障がい者施設や授産施設等に対して、平成21年度の北海道「道内のソーシャルファームに関する実態調査委託業務」にてヒアリング調査を実施した。この結果、それら施設において農産物や加工品等の製造、販売が行われているものの、市場に受け入れられる商品になっていない現状が明らかとなった。また、それら施設においては「なんでも作れるが、何を作ればよいかわからない」と言った声も多数聞かれ、製品の企画やデザインといったマーケティング機能の充実が課題として明確となった。

授産施設や小規模作業所においては製品の販路拡大が急務であり、統一ブランド展開や共通カタログなど販売のプラットフォーム化が求められている。

### ◎事業の概要

本モデル事業を行うことにより、当該地域が抱える農村地域の担い手減少と、障害者福祉施設における生産物の高付加価値化による自立支援、という課題を解決する事を目指している。

「ソーシャルファーム（Social Firm：以下SF）」は社会的弱者の雇用創出を目的とする社会的企業を意味する。本事業では、全国のSFを目指す事業者へ十勝の農産物を供給し、「北海道十勝ブランド」を生かした事業者の市場競争力の向上により、社会的弱者の就労と自立支援につなげる仕組みづくりを行う。そのための食材供給基地として、十勝地方に「SF十勝農場（仮）」を設立する。初年度は地域の協力農家からの仕入れとなるが、次年度以降は自社農場を開設し、社会的弱者の雇用創出を目指す。今後の販路拡大を視野に入れた体制整備のために、市場ニーズおよび地域の協力者の生産能力のデータに基づいた課題の検討を行う。また、全国数か所でSF関連事業者との会議を開催し、販路開拓を支援する。

#### 【事業1】「SF十勝農場（仮称）」の開設・運営に係るコーディネート事業

「担い手」（「SF十勝農場」の運営主体）を対象として、農場の開設・運営に関する助言・指導、及び生産規模・生産体制等を検討するための勉強会を3回程度開催することにより、「担い手」（「SF十勝農場」の運営主体）の経営ノウハウの取得を図る。

#### 【事業2】「SF十勝農場」販路開拓に係るコーディネート事業

「担い手」（「十勝農場」の運営主体）の販路開拓や提携先の発掘を目的とした会議を4回程度開

催する。また、そのノウハウを提供することで、販路開拓等の経営スキルの向上を図る。

### 【事業3】「SF十勝農場」商品の開発・販売に係るコーディネート事業

「SF十勝農場」の雇用対象である障がい者等の社会的弱者を対象に、人材研修を行うことにより、人材育成のノウハウを「担い手」（「SF十勝農場」の運営主体）に提供する。

また、「担い手」（地元農産物生産者）を対象に、地元農業者による農業技術指導、加工技術指導、大手流通事業者による販売指導を実施することにより、栽培・生産・販売等に関するノウハウ移転を行い、経営スキルの向上を図る。

ステークホルダー	役割
①特定非営利活動法人 あうるず	事業全体の企画・運営、協力先との連携
②帯広信用金庫	事業のビジネスモデルや資金調達へのアドバイス
③本別町	農用地の確保協力や設立企業への支援
④共働学舎新得農場	社会的弱者を雇用している実績を活かした指導・アドバイス
⑤森農園	自然農法の導入による、労働集約的な高付加価値農業の確立
⑥本別町商工会	地域企業連携と起業への協力
⑦社会的弱者	高付加価値農作物等の生産・加工等に取り組む

## （1）中間支援の特徴（取組の中で見られた工夫や取組が上手く進んだポイント等）

- …中間支援における特徴的な工夫      ●…中間支援における失敗と対応

### 実施中（平成24年度）

#### ●高付加価値化によって独自の販路開拓を実現

十勝というブランド力を有し、さらに社会的弱者を雇用し、高品質の農作物や商品を生産・販売するという社会的な価値を高めつつ、高品質な商品を提供するという考え方が、一般的な農作物や酪農品とは異なる独自の付加価値となっている。既に、障がい者等の社会的弱者を雇用しながら、高品質のチーズを生産する先進的な取組を行っている協働学舎新得農場等の協力（助言・アドバイス）を受け、大量生産・販売とは異なる独自の販路を開拓している。

#### ●全国ネットワークを活用した販路開拓

全国ネットワークである「ソーシャルファーム・ジャパン」のネットワークを活用して、販路先として可能性のあるいくつかの事業者に対してマーケティングを行った結果、滋賀県大津市「社会福祉法人 共生シンフォニー」が運営する「がんばカンパニー」で製造している「がんばクッキー」の材料として、森農園が生産する無農薬の有機小麦の出荷可能性が高まったため、小麦のテスト出荷及び試作・販売が実現した。

「がんばカンパニー」は50名ほどの障がい者を雇用しており、「がんばクッキー」で2億円程度の売り上げを出している。今回、材料の小麦を全て有機小麦に変更したいという先方のニーズに応える形での試行となった。

その他、埼玉県のNPO法人「ぬくもり福祉会たんぼぼ」とも、ゴボウ茶の取引が成立した。

## 終了後（平成25年度～）

### ●株式会社設立を支援し、供給体制の強化を図った

上述した「がんばカンパニー」への正式な取引を成立させるためには、7 t の有機小麦の出荷が必要になるが、現時点では5 t までしか生産体制が整っていないのが課題となっていた。そのため、新たに開拓した販路への安定供給の実現に向けて、生産元となる森農園の株式会社設立を支援し、生産体制の強化を行った。森農園は10ha の農地を所有しており、そのうち5ha で小麦を生産している。「がんばクッキー」の材料として7 t の生産量を確保するために、生産体制の強化を進めており、平成26年度からは供給可能となる見込みである。また、新たに2名の社会的弱者を雇用する予定である。

## (2) 取組の変遷

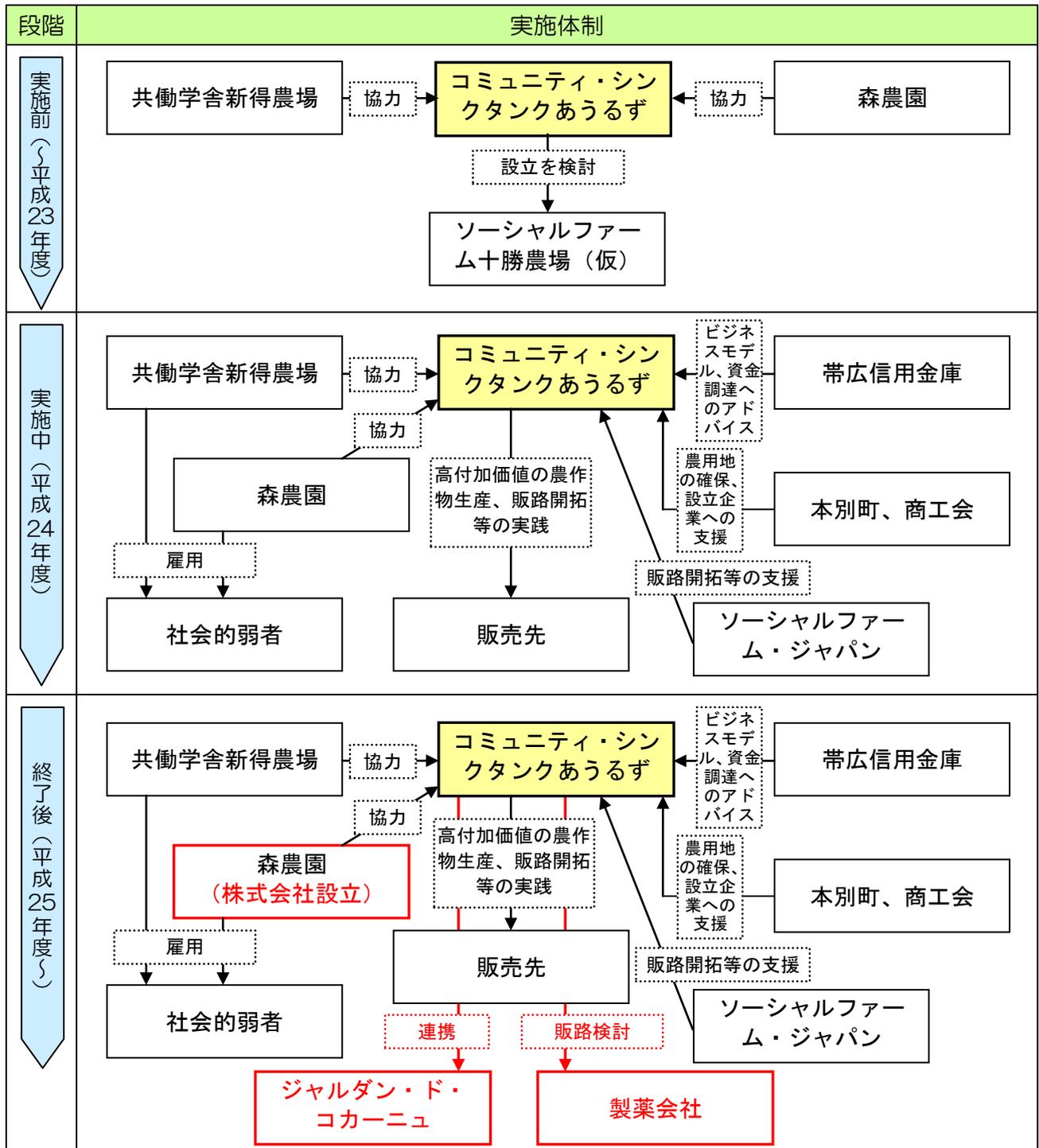
※表中青字下線部の内容は「(1) 中間支援の特徴」で詳述

	主な課題	対応・工夫	効果・成果
実施前（平成23年度）	<p><b>○農業の衰退、障がい者福祉施設の生産物の販路拡大</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・当該地域では農業従事者の高齢化と担い手不足が深刻化。</li> <li>・障害者福祉施設では、生産・加工したものの販路先が限られており、自立支援上も課題があった。</li> </ul>	<p><b>○ソーシャルファーム十勝農場（仮）の開設を検討</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・障がい者の雇用を創出しながら、高付加価値の農作物や加工品の生産・販売を手掛ける「ソーシャルファーム十勝農場（仮）」の開設を検討することとなった。</li> </ul>	<p><b>○ステーキホルダー間の関係構築</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「ソーシャルファーム十勝農場（仮）」の開設に向けて取り組む体制が構築された。</li> </ul>
実施中（平成24年度）	<p><b>○社会的弱者の雇用と高付加価値の農作物等の生産・販売の両立</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・社会的弱者の雇用と高付加価値農作物の生産・販売の両立のためには、先進事例に学ぶ必要があった。</li> </ul>	<p><b>○先進事例である協働学舎新得農場の協力により事業スキームを構築</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成24年度モデル事業では、協力機関として、社会的弱者を雇用しつつ高品質のチーズ生産を手掛ける協働学舎新得農場に参画してもらい、実現可能性の高い具体的な事業スキームの構築を行った。</li> </ul>	<p><b>○独自の販路を開拓</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・十勝というブランド力を生かし、さらに社会的弱者を雇用し、高品質の農作物や商品を生産・販売するという社会的な価値を高めつつ、高品質な商品を提供する独自の販路開拓につながった。</li> </ul>
	<p><b>○独自のブランドを全国へ広げていくことが課題</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・独自のブランドをいかに全国に広げていき、販路先としてつなげていくかが課題であった。</li> </ul>	<p><b>○全国ネットワークを活用し、販路先として可能性の高い事業所を開拓</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニティ・シンクタンクあうるずが加盟する全国ネットワークである「ソーシャルファーム・ジャパン」のつながりを生かして、可能性のありそうな販路先をリストアップして現地視察や意見交換を実施。</li> </ul>	<p><b>○テスト出荷及び生産に結びついた</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・障がい者を雇用しながらクッキー等の生産を行う事業者に対する有機小麦のテスト出荷及び生産が実現。</li> </ul>
終了後（平成25年度～）	<p><b>○生産体制の強化</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・開拓した販路への有機小麦の安定供給のためには、生産体制を強化する必要があった。</li> </ul>	<p><b>○生産を担う株式会社の設立</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・販路先の要求に応える有機小麦の生産量の確保のため、専門の株式会社を設立し、農地の拡大も図りながら生産体制を強化。平成26年度より供給可能になる見込みとなった。</li> </ul>	<p><b>○販路先のニーズに対応</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生産体制の強化によって、平成26年度より有機小麦の全量供給が可能になる見込みとなった。</li> </ul>
	<p><b>○「ソーシャルファーム十勝農場（仮）」開設</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「ソーシャルファーム十勝農場（仮）」の開設に向けて引き続き取り組む必要があった。</li> </ul>	<p><b>○新たな連携先の確保</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・フランスで大規模にソーシャルファームの展開を図っている「ジャルダン・ド・ココア・ニュ」と連携して、日本でまずはシンポジウムを開催することとなった。</li> <li>・漢方薬のための薬草生産に関して、製薬会社との連携を進めており、薬草の試験的な生産も開始。</li> </ul>	<p><b>○取組分野の拡大につながっている</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成24年度の販路開拓等の成果をきっかけとして、新たな協力・連携先の開拓等につながっている。</li> </ul>

### (3) 実施体制の変遷

障がい者等の社会的弱者を雇用し、高付加価値の農作物を生産・販売する「ソーシャルファーム十勝農場（仮）」の開設に向けて、平成 24 年度モデル事業において本格的な検討を行った。開設のための準備（組織の法人格、事業採算性の確保等）を帯広信用金庫や本別町の協力を得ながら進める一方、ソーシャルファーム・ジャパンの全国ネットワークを活用しながら、有機小麦等の販路先を開拓した。

事業終了後も、新たな販路先に向けての生産体制強化のための株式会社設立、フランスの大規模なソーシャルファームネットワークであるジャルダン・ド・コカーニュとの連携、高付加価値農作物として薬草生産の検討（製薬会社との連携も進めている）等、事業を拡大させながら継続している。



## (4) 成果と課題

### (事業の成果)

#### ◎ソーシャルファーム・ジャパンのネットワークを活用した販路開拓

ソーシャルファーム・ジャパンのネットワークを活用し、販路先を検討した結果、滋賀県大津市「社会福祉法人 共生シンフォニー」が運営する「がんばカンパニー」で製造している「がんばクッキー」の材料として、森農園が生産する有機小麦の出荷可能性が高まったため、テスト出荷&試作・販売が実現した。平成 26 年度以降から正式な供給を行う見込みとなっている。

#### ◎テスト用の圃場の確保、生産・販売へ

本別町の緊急雇用事業を活用し、社会的弱者（障がい者等）を雇用して野菜を生産し、道内や都内で販売していく事業を進めており、社会的弱者を雇用した農作物等の生産に関するスキル・ノウハウの蓄積を進めている（あうるずが所有する 0.2ha の圃場を活用）。

本別町では、約 800 あった農家が現在約 300 まで激減し、集約化が進んでおり、高齢化も進んでいることから、農地を手放した高齢者を農業指導者として活用していくことを考えている。

#### ◎薬草栽培の事業化を検討

ha あたりの収益を高めていくことが重要との考えから、近年、関心やニーズが高まっている薬草の栽培を検討している。薬草は価値の高い農作物であるため、収益アップが期待できる。

現在、関心を示している富山の製薬会社と意見交換を行っている（当製薬会社は、社会貢献を重視しており、社会的弱者が栽培する薬草を使用した漢方薬づくりとして期待している）。ただ、薬草は栽培を始めても薬効が得られるまでに 10 年かかるとも言われており、勉強を積み重ねながら、手探りで事業化を進めていく。

### (事業の課題)

#### ◎ブランド力向上のためのデザインを高める

「質がいい」、「食べたらおいしい」だけでは顧客には製品の良さが伝わらない。効果的な伝達方法についてのノウハウが必要であり、その部分については専門家の協力を得ていく予定である。

平成 24 年度モデル事業の事業 3 において、専門家を呼んで、デザインやパッケージ等に関する研修を行ったが、そこでの成果として、ソーシャルファーム・ジャパンのロゴデザイン等を行った。

ソーシャルファーム・ジャパンのロゴについては、今後、岩見沢市・新得町・本別町において生産、開発された農作物や商品に対して付与していきたいと考えている。

## (5) 今後の展望

#### ◎ジャルダン・ド・ココアニュとの連携

ジャルダン・ド・ココアニュは、フランスで大規模に社会的弱者を雇用し、耕作放棄地で有機農作物を生産し、47 の集落（約 25,000 世帯）へ有機野菜を供給している NPO 法人。生産・販売を担うソーシャルファームがフランス全土に約 120 あり、有給スタッフは約 700 名在籍する。

平成 26 年度には、この「ジャルダン・ド・ココアニュ」を招聘して、北海道と九州を結ぶ「仏ジャルダン・ド・ココアニュに学ぶ就労支援シンポジウム」の開催を計画している。

具体的には、農業と福祉、デザイン等に関する意見交換を通じたイメージ共有（ジャルダンのデ

ザイン性の高いコミュニケーション能力からの学び等)、ソーシャルファーム製品の相互販売・交流等を行う予定であり、開催地は北海道(新得町 or 岩見沢市)を想定している。

参画メンバーは、これまでつながりのあるNPO、社会福祉法人、企業等に加えて、法務省、厚生労働省、農林水産省、北海道、新得町等の行政機関、新聞社等のマスコミを予定している。

### ◎有機農業のノウハウ蓄積

鹿追町にある0.2haの圃場で試行的に有機農業を開始しており、有機農業の生産・販売、人材育成等に関するノウハウの蓄積を進めている。有機栽培に関しては、収穫までに3年は必要。

将来的には、あうるずとして農業生産法人の取得も視野に入れている。

### ◎薬草栽培事業の推進

漢方薬づくりのための薬草栽培についても、長期的に取り組んでいく。現在、国内の漢方薬の原材料となる薬草の8割は中国からの輸入となっており、国内産に対するニーズは高いものと考えられる。そこで、森農園等と協力して、社会的弱者を受け入れて薬草を栽培・販売していく事業の実現に長期的に取り組むとともに、将来的な供給先となる製薬会社との関係づくりも進める。

### ◎ソーシャルファーム十勝農場の立ち上げ

ソーシャルファーム十勝農場の立ち上げに向けて、北海道の岩見沢市・本別町・新得町の3町を拠点としてソーシャルファーム事業を展開していく「北海道プロジェクト」を軸に進めていく予定であり、十勝農場の運営主体については今後検討を進めることになっている。